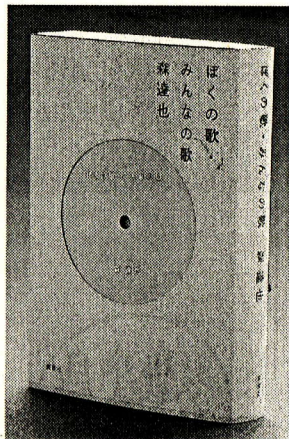


「ぼくの歌・みんなの歌」

森 達也著



作者は一九五六年生まれ。オウム真理教の信者を内側から、ごく自然体で撮影したドキュメンタリー映画『A』で国内だけではなく、海外でも高く評価された映画監督であり、最近では多方面で活躍する著述家だ。だからというつもりはないが、軽いタッチの題名と思いきや、ページを開くとただの紹介文でない、読み応えのある一冊に仕上がっている。

一章ずつが雑誌に連載された一話完結もので、二十五の歌をキーに、それぞれの楽曲と歌詞の成り立ちが時代背景や作者の自分史と絡め展開されており、しかも本人が辿った時々々の内面が正直に描かれている点で私小説顔負けなのだ。あれあれと読み進むうちに、最後には、井上陽水の『傘がない』のメロディーのって、初キッス？の甘酸っぱい場面まで登場したりする。

全体で繰り返し述べられるのは、自分が学

「歌」と時代背景に自分史も

生運動にも就職活動にも乗り遅れてきたモラトリアムの世代であるということだ。しかし、作者は頑なに「世代」でなく、「個」の営みや挫折のディテールを詳細に書き込む。それは、他の著作でも主張する本来の自由な発想を取り戻すため「三人称」や「複数」でない、「一人称・単数」が主語となった語りや思考の復権を自指しているようにも感じられる。

個人的には、童謡の章での「放送禁止歌」のくだりが興味深かった。NHKの従軍慰安婦をテーマにした昭和天皇の戦争責任に触れる番組に、代議士が介入した内容改ざん問題と、自らの番組が納得のいく説明もいまま撮影中止になった体験が重ねられ説得力充分だ。戦後、マスコミが法にはない自己規制を敷き、強化する方向へ歩んできたことへの疑問と危機感が切実に迫ってくる。

過去に何を考えていたか思い出せなくとも、ある歌を耳にしていたときの生理や感覚は記憶にあるかもしれない、というあたりがきの一節からも、この本は「歌」を通して作者本人のドキュメンタリーと言えるかもしれない。

評・宮本誠一(NPO夢屋アラネット代表)

▲講談社・106915E

◇もり・たつや 1956年広島県生まれ。映画監督。ドキュメンタリー作家。著書に「放送禁止歌」など。